

年間第3主日（神のことばの主日）（マタイ 4:12-23）

神のことばが家族の中に



皆さんは、荒っぽい人と聞いてどんな人を想像しますか？私は真っ先に、2008年に他界した父親のことを思い出します。怖かったのは遠洋漁業に従事していた頃です。私は小学生、最後は中学生でした。父親が恐ろしくて、母方の祖母は母が今日は泊まつたらと言つても、首を縦に振りませんでした。ぶっきらぼうで、粗雑で、誰も近寄らせないオーラを出していました。

すべての遠洋漁業従事者がそうだとは決して言いませんが、船乗りは荒っぽい人の代表格ではないかと思っています。それなりの理由もあります。海の上では、機械の操作など一つの間違いが命取りになるので、年長者は若い者をこれでもかと厳しく指導することになり、言葉も態度も荒っぽくなるのだろうと思います。

私は、生まれつき左利きですが、箸と鉛筆だけは右で持たなければ決してご飯を食べさせてもらえませんでした。「言うことが聞けないなら食うな！」と怒鳴られ、茶碗のほうを窓から家の外に捨てられたこともあります。箸ではなく、ご飯の入った茶碗のほうを投げ捨てるんです。考えられますか？

他にも、漁師がいかに荒っぽいかの例として、「漁師と人間がケンカをしてる」という会話をたまに聞きました。この場合「漁師」は人間扱いされない手に負えない存在ということですね。子供の頃は「どうして母親は漁師の父親と結婚したのだろうか」と不思議でなりませんでした。しょっちゅうケンカをし、家を飛び出し、泣いている子どもたちだけ残され、「こんな父親要らない」とさえ思ったほどです。

こういう印象が未だに拭えませんから、イエス様が漁師を弟子にするというのは、物語を初めて聞いた小学生の時「何を考えているのだろうか」と思ったものです。「荒くれ漁師」と言ったりするほど荒っぽい人たちなのに、その人たちを弟子にして何をするつもりなのだろうかと、魂胆が全く分かりませんでした。父親のヨセフは大工だったのですから、大工を弟子にしても良かったはずです。漁師の経験も無いのに、漁師を弟子にしました。

ただし一つだけ、漁師には他に見られない特徴が有ります。私も実際経験したことです。それは、福音の別の箇所から引用すると、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」（ルカ 5・5）これは漁師の良い点だと思います。

獲れるかどうか分からぬ。でも網を降ろしてみる。このチャレンジャー精神は、当時のどの職業よりも優っているかもしれません。私も、漁師の多い教会で、同じ精神で主任司祭の私に協力してくれる姿を何度も目にしました。ですから、少なくとも12人のうちの4人は、チャレンジャー精神旺盛な漁師だったことになります。

教会で活動が前に進まないのはいつも同じ理由です。「それをして、成果が期待できるのですか。」結果を伴うかどうか分からぬ提案をされても、乗ってこないのです。それはそうでしょう。私たちは大抵が会社の組織の中で働いていて、「結果」を常に求められているからです。危険を冒して、結果が見えない仕事は引き受けられないのです。

イエス様は漁師に呼びかけます。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」（4・19）漁のない日が続いたり、ときには大漁になつたり、両方を知っているからこそ、イエスの言葉はすんなり受け入れられたのだと思います。できるかどうか分からぬ。けれども面白そうな呼びかけだった。そこは漁師のペトロとアンデレ、ヤコブとヨハネの心をくすぐったのでしょう。

ただ、中田神父だったら、ふらっと漁師のいるところに行って声をかけたりはできません。そもそも声をかけられません。「危ないよ」「用がないならそこどいて」みたいな声が飛び交う中で、とてもではないですが、声はかけられないです。

ここからは、私の想像です。どうしても漁師に声をかけなければならぬのなら、私だったらこうするだろうという推理です。私は、毎日漁師たちの働きを黙って眺めて、ずっとそれだけ続けて、あまりにもずっと見ているので漁師のほうが気になってくる。それまで待ってから声をかけるでしょう。

「いつまでも見ているけれども、用事があるのだろうか」と思われるまで待つ。「毎日ここに来ていますが、何か用ですか？」心の中でそう思う頃に、「わたしについて来なさい」と言うでしょう。この時点で、イエス様が先に、「人間をとる漁師」であるわけです。漁師たちはとらえられたのであり、すでに「人間をとる方法」を授けられていたわけです。

「人間をとる漁師」としては、イエス様の方が一枚上手でした。「泣かぬなら、鳴くまで待とう時鳥」日本人の感覚で言うとこういうことでしょうか。弟子たちが付いてくる心の準備が出来るまで、何日も、ひょっとすると何十日も、イエス様は待ったのではないかなと考えています。

福音が教えるのは「神のことばです」人間を従わせ、人間に本当に歩むべき道を気付かせるといみことば。老年になって、イエスのことばが神のことばであるなら、きっと人の心を打つ。ようやくその確信が持てるようになりました。それを活かすかダメにするか。あとは説教する司祭次第です。

年間第4主日(マタイ 5:1-12a)